

『枕草子(原文)』

※現代語訳は後半部に付いています。

① 1段

春は曙あけぼの。やうやう白くなりゆく、山際やまぎわすこし明りて、紫むらさきだちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし。

②

秋は夕暮ゆうぐれ。夕日のさして、山の端はいと近ちかうなりたるに、鳥からすの寝所ねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁かりなどのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音おと、虫の音ねなどはた、言ふべきにあらず。

③

冬はつとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭すみ持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、炭櫃すびつ・火桶ひおけの火も白き灰がちになりて、わろし。

④ 23段 たゆまるるもの

精進の日の行ひ。遠きいそぎ。寺に久しく籠りたる。

⑤ 25段 にくきもの

急ぐことあるをりに来て、ながごと長言する客人。まろうじあなづりやすき人ならば、「後に」とても、追ひやりつべけれど、さすがに心はづかしき人、いとにくく、むつかし。

すずり硯に髪かみの入りて、すられたる。また、墨の中に、石のきしきしときしきみ鳴りたる。

⑥ 33段

せきよう説経の講師は顔よき。講師の顔を、つとまもらへたるこそ、その説くことおぼの尊さも覚ゆれ。ひが目しつれば、ふと忘るるに、にくげなるは罪や得らむと覚ゆ。このことは、とどむべし。

⑦ 42段 あてなるもの

うすいろ薄色にしらがさね白襲のかざみ汗衫。かりのこ。削り氷にあまづら入れて、あたらしきかなまり金錠に入れたる。水晶じゆずの数珠。藤の花。梅の花に雪のふりかかりたる。いみじううつくしきちこの、いちごなどくひたる。

⑧ 73段

しのびたる所においては、夏こそをかしけれ。いみじくみじかき夜の明けぬるに、つゆ寝ずなりぬ。やがてよろづの所あけながらあれば、すずしく見えわたされたる。なほいますこしいふべきことあれば、かたみにいらへなどする程に、ただみたる上より、鳥のたかく鳴きていくこそ、けしよつ顕證なる心地してをかしけれ。

⑨ 104段 見苦しきもの

夏、昼寝して起きたるは、よき人こそ、いますこしをかしかなれ。えせ容貌ようぼうは、つやめき、寝腫はれて、ようせずば、頬ゆがみもしぬべし。かたみにうち見かはわしたらむんほどの、生けるかひなさや。

⑩ 104段 はしたなきもの

他人を呼ぶに、「わがぞ」とさし出でたる。物など取らするをりは、いとど。

おのづから、人のうへなどうちいひそしりたるに、幼き子どもの聞き取りて、その人のあるに、いひ出でたる。

⑪ 245段 ただ過ぎに過ぐるもの

帆かけたる舟。人の齡。春、夏、秋、冬。

⑫ 261段 うれしきもの

まだ見ぬ物語の一を見て、いみじうゆかしとのみ思ふが、残り見いでたる。さて、心劣りするやうもありかし。

『枕草子(現代語訳)』

① 1段

春は明けがたが良い。ようやく辺りが白んでゆき、山の上にある空がほかに明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている(のは風情がある)。

夏は夜。月のある夜はもちろんだけど、月のない闇夜でもやはり、蛍が多く飛び交っているのは良いものだ。また、一つか二つ、蛍がほかに光って飛んでいくのも情趣がある。雨など降るのもしみじみとする。

②

秋は夕暮れ。夕日が差して、山の端に太陽が近づく頃、カラスがねぐらに帰ろうとして、三つ四つ二つと飛び急いでいる姿も情趣がある。まして、雁などが連なつて、とても小さく見えるまで飛んでいく姿は、非常にしみじみとした情感を誘う。日が落ちてからの風の音、虫の声などは、もう言うまでもない。

③

冬は早朝。雪が降っている情景は言うまでもない。霜が真っ白に下りているさまも、またそうでなくても、とても寒い朝に、火などを急いで起こして、炭を持って御殿を渡っていくのも、冬の朝にとても似合っていてふさわしい。(でも)昼になって、気温が上がって暖かくなると、炭櫃・火桶の火も白く灰をかぶってしまったて、これは良くない。

④ 23段 怠けがちなもの

精進の日のお勤め。遠い予定のための準備。お寺に長く籠って修行すること。

⑤ 25段 にくらしいもの

急な用事がある時にやって来て、長話をするお客。軽々しく扱える人であれば、「また後でね」とか言いつて追い返してしまうこともできるが、気を遣わなければならぬ高位の貴族であれば、やはり簡単には追い返せないのので、にくたらしく思ってしまう。

硯の中に髪の毛が入っているのに、そのまま擦ってしまった時。墨の中に石が混じっていて、きしきしという不快な音が立った時。

⑥ 33段

説経の講師は顔が良いほうがよい。講師の顔に見とれて見守っていればこそ、その説き聞かせる仏法のありがたみも分かるというものである。よそ見していると、聞いたことをすぐに忘れてしまうので、顔の悪い講師の説法を聞くと、説法をちゃんと聞けずに罪を犯してしまうような気分になるのだ。こんなことは、書かないでおくべきなのだが。

⑦ 42段 上品なもの

薄い白地の下着を重ねて着ること。鴈の卵。削り氷に甘い蜜を入れて、新しい金属の椀に入れたもの。水晶の数珠。藤の花。梅の花に雪が降りかかっているさま。非常にかわいらしい幼な子が、イチゴなど食べているのも上品である。

⑧ 73段

人目を忍んで人と逢っている所では、夏こそ趣深い。大変短い夜が明けてしまつて、つい一睡もしないでしまう。昨夜からそのままどこも全部開け放しなので、涼しく見え渡される。なお、もう少し言うべきことがあるならば、互いに応答などするうちに、二人が座っているすぐ上から、カラスが高く鳴いていくことこそ、すっきり見られた気がして情趣がある。

⑨ 104段 見苦しいもの

夏に昼寝するのは高貴な人なら風情があるが、不細工の場合、顔は脂ぎるわ、パンパンにむくんでいるわ、なんなら顔そのものが歪んですらいるようだ。不細工同士が昼寝をして互いに顔を見合わせてしまった時なんか、生きる意味すらわからないほどだ。

⑩ 104段 気まずいこと

他の人が呼ばれたのに、自分だと思って出て行ったこと。それが物を頂く時ならばなおさら気まずい。

人の噂話や悪口を言っているのを小さな子どもが聞いていて、それを本人がいる時に話してしまうこと。

⑪ 245段 あつという間に過ぎ去っていくもの

帆をかけた舟。人の年齢。春、夏、秋、冬。

⑫ 261段 うれしいもの

まだ読んだことのない物語の一卷を読んで、とても続きを読みたいとばかり思っていたが、その残りを読むことができた。

さて、思っていたよりも内容が劣っていることもあるのだが。